# 悲劇の記憶

## —Jennifer Johnston の *The Gingerbread Woman*—

吉 田 文 美

### I. はじめに

*The Gingerbread Woman* は、Jennifer Johnston (1930- ) が 2000 年に発表した小説である。Johnston は、Anglo-Irish の地主階級の衰退を背景とした 1974 年の *How Many Miles to Babylon?*、北アイルランド問題を取り上げ、ブッカー賞の候補作となった *Shadows on Our Skin* (1977 年) などで高い評価を得ている。一方で 1998 年発表の *Two Moons* では、旧家の衰退や北アイルランド問題といったテーマは影を潜め、50 歳の女優 Grace とその母親の心の葛藤が中心に描かれる。第 1 次大戦期のアイルランドを舞台とする *How Many Miles to Babylon?*などの初期の代表作が主人公のモノローグや心理描写のみで語られるのに対し、*The Gingerbread Woman* は Grace とその母の 2 人を主人公とした *Two Moons* と同じく、主人公 2 人の語りと心理描写を中心に展開する。語りの手法という点では、初期の作品よりも重層的な構造を備えた作品と言える。その一方で、北アイルランド紛争が終息に向かった 1990 年代を舞台とし、紛争から目を背けて生きてきた女性と紛争が残した爪痕に苦しむ男性を対比させ、アイルランドの負の歴史の一端を垣間見せてくれる作でもある。

### II. 2 人の主人公とあらすじ

*The Gingerbread Woman* の 2 人の主人公のうち 35 歳の Clara Barry は、海外の大学でアイルランド小説について教える短期契約の講師として働き、文芸記事のライターもしている女性だ。小説が始まる時点では手術を受けたばかりで、ダブリン郊外の町 Dalkey の近くにある伯母から相続した家で療養中である。もう 1 人の主人公 36 歳の Laurence McGrane（通称 Lar）は、北アイルランドで数学教師をしている。海外を渡り歩く Clara とは対照的に「ブリテン諸島から出たことがない」(*The Gingerbread Woman* 54)　男性で、妻 Caitlin と娘 Moya をある事件で失っている。妻子を失った不幸から立ち直れない Lar は、新学期の開始直前に Ballycastle 近くにある自宅を衝動的に飛び出し、愛犬 Pansy とともに国境を超えて南に向かう。小説の始まった時点では、妻と滞在したことのある

Dalkey 近くのホテルに滞在している。

*The Gingerbread Woman* は、ダブリン郊外の Dalkey で生まれ育った Clara と北アイルランドで育った Lar が出会ってから別れるまでの 4 日間の出来事を描く。たった 4 日を描く 200 ページほどの作品だが、登場人物の会話、主人公 2 人のモノローグや過去の回想、作中でクララが執筆する小説の中の語りなどが錯綜し、展開を追うのが難しい作品である。詳細な要素を数多く取りこぼすことにはなるが、主人公たちのモノローグや過去の回想部分、Clara が作中で執筆する小説の語りなどを除いて、4 日間の Clara と Lar の行動を時系列で並べると以下のようになる。

第 1 日目

(1) Killiney Hill[(1)]の崖の上で、Pansy を連れた Lar が Clara に声をかける。

(2) Lar は両親の家に電話して、父親と言い争いになる。

(3) 夕方、雨の中を The Druid Chair (Killiney Hill 近くに実在するパブ) に出かけた Clara は、主治医の Doctor Ivan[(2)]と口論になる。Doctor が去った後、Lar と Pansy が The Druid Chair にやって来る。Clara は唐突に Lar を自宅に誘って、テレビを一緒に見る。

(4) 番組途中で眠ってしまった Lar は、Clara に起こされた後、傘を借りてホテルに戻る。

第 2 日目

(1) Clara は、電話で母親に小説を書くつもりだと告げる。

(2) Clara の家を見つけられなかった Lar は Killiney Hill までやって来て、Clara に傘を返す。その途端に雨が降り始めたので、再び Clara は Lar と Pansy を連れて自宅に戻る。

(3) 家に着いた後、Lar は妻 Caitlin と娘 Moya を「事故」で亡くしたと打ち明ける。Clara も自分が 外科手術の直後だと告げる。Clara は、Pansy と一緒に家に逗留するよう Lar に勧める。

(4) Clara は Macintosh Computer を使って、小説 *The Gingerbread Woman* を書き始める（これ以降、コンピューターの起動音が Clara の執筆する小説での語りを示す)。ホテルをチェックアウトした Lar と Pansy が戻って来る。

(5) 午後 7 時 30 分ごろ、Clara は母の家での夕食に Lar を連れて行く。

第 3 日目

(1) 朝のうちに、Doctor Ivan が休暇に出かけた Oughterard (Co. Galway) から

Clara に電話してくる。

(2) Lar が Clara をドライブに誘う。山の中で風景を楽しんでいたところ、Clara が何気なく発した言葉に Lar が取り乱す。

(3) Clara の家に戻った後、Lar は夕食の買い出しに Dalkey へ出かけ、Clara の母 Mrs. Barry に会い、彼女との会話で初めて Clara の姓が Barry だと知る。Lar は、Mrs. Barry に自分の妻子が 2 年前に爆弾テロに巻き込まれて亡くなったこと、妻子を亡くしてから自分が心に秘めてきた絶望や怒り、憎悪を語る。Mrs. Barry は、その話を Clara にしないように Lar に頼む。

第 4 日目

(1) Clara は母からの電話で起こされ、Lar を早く北アイルランドに帰すように促される。

(2) Clara の入浴中に Doctor Ivan が電話をかけてきて、Lar が応対をする。

(3) Pansy と浜辺を散歩する間、Lar は先に進むように促す Caitlin の声を幻聴で聴く。

(4) 朝食後に Lar が Clara に浜辺での幻聴の話をしていると、Doctor が "house call" と称してやって来る。Doctor と言い争いになって Clara が席を外した後、Lar は自分の身の上について、Doctor に打ち明ける。Doctor は北アイルランドに戻るよう Lar に勧める。

(5) Lar は自分の母に電話し、次の日の夜には帰ると告げる。

(6) Clara に夕食をご馳走することにした Lar は、The Clarence Hotel[(3)]のレストランを予約する。2 人がタクシーで出かける直前に、Doctor が再びやって来るが、Clara は Doctor を Pansy とともに家に残し、Lar と出かける。

(7) レストランで、Lar は Mrs. Barry と Doctor に止められていたにも関わらず、Clara に妻子が亡くなった本当の経緯を話す。Clara は Lar を恨み、そのことで自分にも嫌気がさす。

(8) 帰宅後、Lar は Pansy を帰郷前の最後の散歩に連れ出す。

(9) Clara は、真夜中近くに自分の小説の結末を書き終える。次の日の朝には、帰郷する Lar に朝食をたっぷり食べさせて送り出そうと考える。

III. Clara と Lar の出会い

*The Gingerbread Woman* の第 1 日目に Clara と Lar が最初に言葉を交わすのは、早春の Killiney Hill の崖の上である。Lar が Killiney Hill で Clara を見たのは、この日が最初ではなく 3 度目だ。

That woman (Clara) was there again.

It was the third time he (Lar) had noticed her standing on the edge like that . . . she was about to take off across the bay. He had noticed how thin she was, and pale like a ghost.

Maybe she was a ghost. Maybe she could fly.

. . . . .

She took a small step even closer to the edge and he began to run towards her.

'Hello there!'

. . . . .

'Yes. I just wondered. I do apologise for. . . You're so close to the edge and I . . . well I . . .'

(*The Gingerbread Woman* 12)

青白い顔で崖の上に立つ Clara を見て、飛び降りるのではと思った Lar は彼女に声を掛けてしまうが、Clara の方は投身自殺するつもりなど全くない。気まずい出会いをした 2 人だが、Lar の愛犬 Pansy が 2 人の仲をつなぐことになる。次に 2 人が出会う The Druid's Chair というパブでは、雨天のため客が少ないおかげで、Lar は Pansy を連れて入店することを許可される。Clara を見つけた Pansy が Lar を彼女の席へと引っ張っていったため、2 人は相席になる。Lar と Pansy が来店する直前に、主治医の Doctor Ivan と言い争い、取り乱していたことも影響したのだろうか。この場面で Clara は、知り合って間もない Lar を「一緒に家で Morse(4)を見よう。」と誘う。唐突に招かれた Lar だけでなく Clara 自身も、そんな申し出をしてしまったことに大いに戸惑う。

'Why don't you come home and watch Morse with me?'

<u>He was confused by her invitation. So apparently was she. Her pale face had become red.</u>

(*The Gingerbread Woman* 40; Emphasis by Yoshida)

Clara は慌てて申し出を引っ込めようとするが、Lar は彼女の招待に応じることにする。ところが、Clara の家のテレビで『主任警部モース』を見ながら、Lar は眠りこけてしまう。十分に睡眠を取れていない様子を見て、Clara は Lar を心配するようになる。

その次の日、Lar は Killiney Hill で Clara に借りていた傘を返すが、また雨が降り始め、再び彼女の家に転がり込む。この時に、Lar は妻 Caitlin と娘を「事

故」で亡くしたと Clara に打ち明ける。Clara は、「あなたに迫るつもりはないから」と断言して、2~3 日自分の家に泊まるよう Lar に勧める。会ってまもない男性を自宅に泊める気になったのは、ホテルでは眠れていない Lar と、散歩に連れ出してもらう以外では自動車に閉じ込められている Pansy に Clara が同情したからだろうとうかがえる。

> Look,' she (Clara) said eventually, 'I think you should go back to your hotel, pack up and check out. You can come and stay here for a few days. Both of you. You wouldn't have to keep Pansy in the car then. Just a few days, mind you. I have a little spare room upstairs.' She pointed towards the ceiling. 'Perhaps you might sleep better there. Hotels are so, I don't know. Horribly empty.'
>
> (*The Gingerbread Woman* 66; Emphasis by Yoshida)

Lar は躊躇するものの、結局は Clara の申し出を受け、彼女の家に滞在することになる。

IV. Clara と Lar の共通点

Lar が Clara の家に滞在をはじめるところまで読むと、Clara と Lar には少なからず共通点もあることが明らかになる。出身地こそ違うが、どちらも年齢が 30 代半ばだ。2 人とも教師として働いており、過去に大きな不幸を経験して深く傷ついている。それぞれが、自分の親との間に葛藤を抱えていることも示される。Lar に声をかけられるシーンに先立って 8 ページに渡って続く Clara のモノローグには、彼女が主婦および母として完璧すぎる自分の母親 Mrs. Barry に対して、複雑な思いを持っていることが示されている。

> I went briefly several years ago to an analyst — that was during my spell in London — and he tried to persuade me that i[(5)] wanted to sleep with my father and somehow exterminate my mother. I found this quite confusing, so i stopped going to see him. No harm to my father, but i had seen sexier men around, I had actually lusted after and been to bed with younger and sexier men. I had no problems in that area of my life. Then I told him about my mother's jam, and how I would be bereft without that but he didn't believe me. Analysts don't really care about things like jam.
>
> (*The Gingerbread Woman* 4)

ここでClaraは、ロンドンで精神分析医に通った時の経験を語っているのだが、「女性は男親に執着するもの」というありきたりの精神分析に反発しながら、母親の作ったジャムがないと喪失感を覚えるのだと医師に訴える。同じモノローグの中では、海外での仕事が一段落すると、伯母から相続したDalkeyの家に戻ってきて、母親のジャムを食べ元気を取り戻して再び旅立っていくとも語られている。

> ... i bring things home from my travels and stack them round the walls of my little house here in Dalkey. Centre of the World. Then I come here to lick my wounds and eat my mother's jam, take big deep breaths and get ready to go away again.
>
> (*The Gingerbread Woman* 5)

世界中の大学を転々としながらアイルランドの現代小説について教えるClaraにとって、たまにしか帰ってこないにも関わらずDalkeyの自宅は「世界の中心」で、そこで口にする母親のジャムは疲れた心を癒してくれる糧なのだ。

その一方で、大きな手術を受けたばかりのClaraを気遣う母親が同居を勧めても、Claraは頑なに拒絶する。手術を受けることになった経緯や子どもが産めない体になっていることも、母親には打ち明けない。主治医のDoctor Ivanには、自分の病状の詳細を母に伝えないように口止めをしている。Killiney Hillで傘を返してもらう場面で、Larから母親に対して厳しいのではないかと指摘された時には、「母のようにはなりたくないが、結局は母のようになってしまうだろう。母のようにいい人になりたいという誘惑は、あまりに強い」という意味の言葉も口にする(*The Gingerbread Woman* 50)。2日目の夜に母の家での夕食を取った後では、自宅に戻る途上で「母の近くにいると自分があまりに未熟であると思えてしまう上に、母が自分のことを知りすぎていて、ほとんど秘密が持てないから疎ましく思うのだ」ともClaraは述べる(*The Gingerbread Woman* 94)。30代半ばになっても母親の影響下から抜け出せていないことは、Claraにとって腹立たしいことなのだろう。

Claraが自分の母に対して厳しいと指摘するLarの方も、他人のことは言えないのではないかと思われる面がある。妻子を失ったLarを心配する両親に、反抗的で冷淡な態度を取り続けているからだ。

> *'It's time you snapped out of it, Lar. Aye it is. Well beyond time.'*

*His father's tired face as Lar had opened the front door to him; eyes drooping at the corners, faded blue now and full of sadness and at the same time a curious anger.*

*'You must listen to me. You've got to snap out of it, son.'*

*And he had slammed the door in the old man's face.*

(*The Gingerbread Woman* 10; Italicized in the original text)

上の引用は、Clara と出会う前の Lar の回想からの抜粋である。彼は訪ねてきた父親に対し、口も聞かずに玄関のドアを閉めて追い返したことがある。Clara と出会った直後には、悩んだ末に両親の家に電話するが、戻ってくるように説得する父親に対して、険悪な言葉を投げつけてしまう。

'I think we should talk, son. Would you like me to come down?' His father's voice was gentle.

'No. There is nothing to talk about.'

'Well, come home then. Come here and let us mind you until . . .'

'Until what?'

'Until you're well again.'

'There is nothing wrong with me.'

'You're not yourself.'

'I am myself. I am Laurence McGrane. I am a schoolteacher. I know who I am. I know my wife and child were murdered. I know I am acting in a wild and irrational way towards the people who say they love me. I know that one day I will return to normality and be quiet and polite and acceptable, but not yet. I want to be allowed to scream and burn and hate, until I am sickened by my self-indulgence. I haven't got a date for that. So fuck off Dad and stop trying to heal me.'

He had never sworn at his father before and the hand that held the receiver trembled as he did so.

(*The Gingerbread Woman* 27-28)

上のシーンでは、もともと Lar は穏やかな気性で、親に対して反抗したこともない人ことが示唆されている。しかし、妻の Caitlin と出会った後の Lar は、両親の意に染まない行動も取っていたことも明らかになっていく。

‘ “What’s wrong with the register office?” she (Caitlin) said. “Why spend all that money and energy on all the other carry-on? We only do that for our parents. I don’t want to get married for my parents. It’s just you and me. That’s what I want.” Oh God, I remember I had a few bad nights over that. I thought my mother would go mad. Caitlin just laughed. “Sure she’ll come round in time,” she said. “And it won’t bother God too much. He’s got more important things on His mind, or at any rate He bloody well ought to have.” She was like that. Impulsive. Very modern, I suppose. Wonderful.’

. . . . .

‘My mother was upset, yes. I hated that. I didn’t want to hurt anyone. My father said nothing, absolutely nothing, but she . . . well, I think she thought I was laying myself open to some dreadful retribution. She believes in the dreadfulness of God as well as in His loving kindness.’ He smiled sadly. ‘She’s old-fashioned. Anyway, we got married, just as Caitlin wanted us to. No fuss. No carry-on. A few pals, a few jars. A very expensive meal, just the two of us. Roscoffs(6). Have you heard of Roscoffs?’

‘Yes. Everyone’s heard of Roscoffs. Belfast’s best.’

‘She didn’t want to go there, but I persuaded her. I felt gross extravagance was important at that moment. The bride wore black. I didn't tell my mother that.’

(*The Gingerbread Woman* 60-61)

上の引用は、Lar が妻 Caitlin との結婚の経緯を Clara に語る場面からの抜粋だ。Lar は Caitlin の望むまま、教会での結婚式や知り合いを招待しての披露宴も行うことなく結婚し、Lar の両親、特に信仰深い母親に深いショックを与える。Johnston は、1984 年の作 *The Railway Station Man* でも画家を目指す妻と数学教師の夫というカップルを登場させている。*The Railway Station Man* では、ヒロインの Helen は、画家への道を諦めて結婚するが、常識的で厳格な夫から精神的な抑圧を受けている。Helen は夫が非業の死を遂げた時に衝撃を受けるが、その一方で夫から解放された気分にもなる。*The Gingerbread Woman* の Lar と Caitlin の関係は、それとは正反対だ。Caitlin は Helen と違って、自信と活力に溢れた新進気鋭の画家で、閉鎖的な環境で育った穏やかな性格の Lar を振り回している。しかも Lar は、進歩的で周囲の思惑を意に介さない Caitlin の行動に戸惑いながらも、それを否定することなく“Wonderful”と賞賛する。Lar は Caitlin と暮らすことに幸せを感じていたので、*The Railway Station Man* の Helen とは

逆に、彼女を失ってしまった時に深い絶望に囚われる。Caitlin が生きていた間は両親とは遠慮がちに接して対立を避けていたが、妻子を失った後では 2 人の差し伸べる手を拒否して心を閉ざす。

V. Clara と Lar—対立する思い

*The Gingerbread Woman* で、Clara と Lar は互いが抱える不幸の影に引き寄せられているように見える。例えば、2 日目の晩の Clara の母との夕食後、家に戻って来た Clara は Lar の顔に触って "Are you alive? . . . You look like a ghost." と言うが、Lar の目にも彼女が幽霊のように見えている(*The Gingerbread Woman* 95)。しかしながら、Lar が Clara の家に滞在する間、2 人の間には最後まで「通りすがりの知り合い ("a passing stranger") 」*(The Gingerbread Woman* 197) 以上の関係は生まれない。同じ家で寝起きをともにしながら 2 人の間に友情めいた関係以上のものが生まれないことに対しては、非現実的だと評価する向きもあるかもしれない。だが最後まで一線を超えない関係が説得力を持つのは、2 人が相手に対して反感や嫌悪感を覚える場面も多いからだろう。2 人は互いに相手のことを頭がどうかしているのではないかと疑い、理解し難いと見なす。

2 人が反発し合う理由の一つは、Clara の北アイルランドに対する強い偏見だ。

> '. . . You're from the North.'
>
> 'Glens of Antrim.'
>
> 'I hear it's very beautiful up there.'
>
> 'Yes. You should go and have a look some day. See for yourself.'
>
> She shook her head.
>
> 'It's not on my itinerary. I've never been further north than Drogheda(7). Even there you can smell the disease when the wind is in the wrong direction.'
>
> He put his glass on the table and stared at her. 'Would that be the attitude of many people down here?'
>
> 'Quite a number. Just ask around and you'll see for yourself.'
>
> 'Disease?'
>
> Terminal hatred – infectious, contagious, hereditary. A bit like AIDS – incurable.'
>
> 'You're a bigot?'
>
> 'I suppose I must be. We're all bigots when push comes to shove. Personally I think I'm just tired and a bit cynical, and of course I didn't mean to imply that you are diseased, merely at risk.'

(*The Gingerbread Woman* 39)

上は、Clara が Lar と 2 度目に会った時の The Druid Chair での会話の一部だが、Clara は北アイルランド出身の Lar の前で、随分と不躾に北アイルランドに対する不快感を表明する。Lar が自分の出身地としてあげる Glens of Antrim は、風光明媚な観光地として有名な場所だ。Clara は、Glens of Antrim の美しさについて知ってはいるが、絶対にそこには行かないと断言する。さらに、国境のこちら側にある Drogheda からでも disease—病気のように伝染し、エイズのように治療不可能な憎しみ—を感じることができると続ける。この「治療不可能な憎しみ」が、いわゆる北アイルランド問題を指していることは明らかだ。Lar が家に滞在することになった際にも、Clara は「この家で北アイルランドの話はするな(“No North in this house”)」と釘をさす(*The Gingerbread Woman* 81)。

Clara と Lar が相容れないのは、彼らを襲った悲劇が全く性質の異なるものであることも一因だろう。Clara はニューヨーク大学で教えていた時に、裕福で魅力的な男性 James Cavan （姓の発音は K’van）と恋に落ちる。しかし、彼が別の女性と結婚していて子供までいることを隠していたと知り、別れを告げる。そればかりか、Cavan にうつされた淋病が重症化して、子宮を失う羽目になる。一方、Lar は最初のうちは妻子が事故で死んだと Clara に語るが、最後には、軍用トラックを狙った爆弾テロに巻き込まれて死んだのだということが明かされる。

2 人がそれぞれに背負った不幸と、どのように折り合いをつけようとしているかも対照的だ。Clara は早く自分の不幸を忘れたいと願い、忘れるためにあらゆる手段を尽くしているように見える。この小説の巻頭にはエピグラフとして、シューベルトの『岩の上の羊飼い』（ウィルヘルム・ミュラーの詩に曲をつけた歌曲）の歌詞の一部[8]とそれに対する英語訳が掲げられている。『岩の上の羊飼い』の歌詞のうち、*The Gingerbread Woman* のエピグラフとなっているのは、最後の 4 行、「春が近づいてきて、旅立つ準備ができている」と歌われる箇所だ。

*Der Frühling will kommen*
*der Frühling meine Freud*
*nun mach’ich mich fertig,*
*zum Wandern bereit.*

Spring is on its way
Springtime—my delight!

Now I shall make ready
To begin my travels. . .

「羊飼い」というとキリスト教的な意味を持つこともあるが、この歌曲は恋人を失った羊飼いの悲嘆を歌ったものなので、ここでの「羊飼い」はパストラル文学の主人公—若い娘に恋をする羊飼い—に近いものだろう。『岩の上の羊飼い』は、*The Gingerbread Woman* の本文の中でも、Clara が絶望しそうになったとき、頭の中に思い浮かべる音楽としてたびたび登場する。この歌の歌詞を思い浮かべながら Killiney Hill の崖の上に立つ Clara の姿は、岩の上に佇んで歌の力で悲しみを乗り越えようとする羊飼いの姿と重なる。この曲は、傷が癒えたら本来の自分を取り戻し、再び故郷から旅立つ力を得たいと願う Clara を鼓舞するものなのかもしれない。

2 日目に雨を避けるために Lar と Pansy を連れて自分の家に向かう時、Clara は若くして偉業を成し遂げた人々について語るが、その中では『岩の上の羊飼い』を作曲したシューベルトの名も挙げられる。

> 'He (Schubert) died young, you know. Thirty-two. At least, I (Clara) consider that to be young. Just think of all that achievement. I bet you're more than thirty-two. I am anyway. And what have you done? Excuse me, maybe you've done a lot of achieving. I haven't. I've done a lot of travelling and taught quite a number of people about Elizabeth Bowen and Kate O'Brien. A lot of travelling, but no achieving. I keep thinking about Schubert, Keats, Mozart, J.C. Look what they achieved. They all died young.'
>
> 'J.C.?' he (Lar) asked and then realised his foolishness. 'Oh, yes. J.C.'
>
> 'In terms of achievement, not of course Godishness. I'm not talking about that sort of thing.'
>
> . . . . .
>
> '. . . And of course there was Chatterton, the marvellous boy – he was even younger. A child. *Oh, synge unto me roundelaie, O droppe the brynie tears with me . . .*' (9)
>
> He adjusted the umbrella; she didn't appear to notice.
>
> 'Batty, of course, but at least he did do something. How awful, how truly awful to think that you might die without doing anything, leaving anything memorable.' She pulled at his sleeve with her fingers.
>
> 'Yes,' he answered.

'That is why I wasn't contemplating the terminal jump the other day.'
(*The Gingerbread Woman* 52-53; Italicized in the original text)

この Lar との会話の中で、Clara は Schubert を筆頭に若くして亡くなったが人の記憶に残ることを成し遂げた人々を引き合いに出し、何も残さないうちに死ぬのは恐ろしいと口にする。Schubert の曲は、人の記憶に残ることをしたいという Clara の気持ちを掻き立て、生きる気力を呼び起こすものだとも考えられる。

人の記憶に残ることをしたいという願望からか、Clara は Cavan との恋愛を題材に小説を書き始める。面白いことに、Clara が作中で書く小説のタイトルも *The Gingerbread Woman* だということになっている。小説のタイトルが、童謡の "The Gingerbread Man" に由来するのは明らかだ。童謡のジンジャーブレッド・マンが自分を作った夫婦の元から逃げ出し、誰にも食べられないよう逃げ回るのと同じく、Clara は自分を生んだ母親から逃げるように、様々な国を渡り歩き、兄弟や友人たちが恋愛に夢中になるのを横目で見ながら、特定の男性に深くのめり込むような恋愛を避けていた。

I watched my siblings with a certain amusement, and also my friends who climbed rather than fell into love while I kept running like the Gingerbread Man, away, away. You can't catch me, I'm the Gingerbread Man. You will never catch me. I, upper case, am the Gingerbread Woman.
(*The Gingerbread Woman* 83)

それにもかかわらず、James Cavan の欺瞞を見抜くことができないまま、彼と深い関係にのめり込み、酷い目に遭ってしまう。Clara は自分の失敗を、最後に悪賢いキツネにだまされ食べられてしまう The Gingerbread Man の物語(10)になぞらえ、自分の過去を整理しようとしているように見える。

とはいえ、彼女にとって過去を忘れることは、容易いことではない。Lar と出会った次の日の朝、Clara の寝起きの夢には春を歌うナンセンス詩が登場する。

*De spring is sprung, de grass is ris.*
*I wonder where de flowers is?*
*De boid is on de wing,*
*But dat's absoid,*

*How can de boid be on de wing?*
*De wing is on de boid.*

Why do such silly things wake me?

Why is that silly piece of doggerel leaping in my head? Why not the more salubrious *Der Frühling will kommen, der Frühling meine Freud'*?

(*The Gingerbread Woman* 43; Italicized in the original text)

Clara は、目覚めているときにシューベルトの『岩の上の羊飼い』を思うが、夢の中では高尚な歌曲が、同じように春を歌う歌とはいえ、ニューヨークの下町訛りの童謡(11)に置き換えられてしまう。これは、彼女がニューヨークでの Cavan との思い出に深く囚われていることを暗示する。小説を書くことには、過去を整理して客観的に捉える効果はあるだろうが、Cavan を忘れたい Clara にとっては、諸刃の剣だ。

That's where I will stop for today.

There is something terrible about remembering, even remembering such moments of extraordinary excitement. Also there's the notion in my mind that I am really inventing all this as I put it down. I am moulding reality into fiction. Is that something that always happens? I don't know yet. I suppose I will find out.

(*The Gingerbread Woman* 88-89)

上の引用の直前では、Clara は Cavan に対する恋を自覚した時の高揚感を描いている。幸せなひと時があったとはいえ、苦い結果に終わった恋を思い出すことは Clara にとっては酷い苦痛であることがわかる。一方で Clara は過去を小説にすることで reality を fiction へと作り替えているのだとも考える。fiction を作り上げることで、現実に起こった苦悩が昇華される可能性を求めているようだ。

Clara が辛い過去を忘れて立ち直ろうと足掻いているのとは逆に、Lar は過去の悲劇を忘れることを断固として拒否する。Clara が Doctor Ivan 以外に過去の不幸を知られていないのに対して、Lar は妻子を失ったいきさつを家族や親しい人たちに知られてしまっている。家族や友人たちは彼を慰め、立ち直らせようとしているようだが、Lar は慰めたり励ましたりしようとする人々の善意を拒んでいる。

Lar は、亡くなった妻 Caitlin との思い出に浸るあまり、独り言を言うことも

ある。ホテルをチェックアウトした後、Clara の家に落ち着いた Lar は茶葉の場所を教える Clara の声と、いつも頭の中で聞いているはずの妻の声を混同しそうになり、思わず妻に話しかけるつもりで "It does not mean that I am forgetting you." (*The Gingerbread Woman* 77)と独り言を言う。それを耳にした Clara は、自分と違って Lar は「頭の中にいる誰か」との会話を楽しんでいないと指摘する。Clara の言葉は、図らずも Lar の心理状態を的確に言い当てている。Lar にとって本来ならば幸せに満ちた思い出となるはずだった妻の言葉は、呪いに近いものに変貌しているのではないかと思われる。妻と娘の葬式を回想するシーンでは、進歩的な Caitlin に影響されて神への信仰を失っている Lar は、もはや葬式で読み上げられる「神を信じるものは、死んでも生き続ける、決して死ぬことはない」という聖書の言葉を信じることができない。そして、なぜ妻が自分から信仰を取り上げたのかと自問する。

> He (Lar) had put on his clean clothes, of course, and had gone to the funeral and had closed his ears to the words that were spoken, and his eyes to the sorrow on the faces of the people around him.
>
> *I am the resurrection and the life saith the Lord.*
>
> Caitlin had taught him not to believe those words.
>
> *He that believeth in Me, though he were dead, yet shall he live.*
>
> . . . . .
>
> *And whosoever liveth and believeth in Me shall never die.*
>
> Why had she taken that security from him, so that now he could receive no comfort?
>
> . . . . .
>
> So she had willed him to be comfortless without her.
>
> Suddenly he liked that idea. He liked that notion of ruthlessness in love.
>
> (*The Gingerbread Woman* 90-91)

だが、Lar が信仰を失ったことを切実に後悔しているとも思えない。Caitlin が、無慈悲にも彼女なしでは安らぎが得られないように信仰を奪ったのではないかと考えたときに、彼女の残酷さを責めるのではなく、それを好ましいと思ってしまうからだ。結局のところ、Caitlin を失った悲しみに浸りきっている Lar には、信仰による救いを求める気持ちなど、そもそも生まれえなかったのではないか。Lar の回想から想像する限りでは、Caitlin は奔放だが決して悪意ある女性ではない。しかし、亡くなった今となっては彼女の声は亡霊のように Lar に

取り憑き、過去の悲劇を繰り返し思い出させ、彼の心を縛り続けている。もはや神に対する信仰は、Lar が取り憑かれている悲しみを癒す手段とはなり得ないのだ。

VI. Lar の告白と Clara の小説

Lar が妻子を失った悲しみで精神的に追い詰められており、今も不安定な状態にあることは、小説の最初から彼のモノローグや回想で明らかにされている。そんな彼の心理状態がはっきりと表面化するのは、第 3 日目になってからだ。景色を見たいと Clara を誘ってドライブに出かけた Lar は、車を止めて景色を見ているとき、彼女の言葉を聞いて取り乱す。

> . . . High above the hill a hawk hovered, its wings barely moving.
>
> Lar thought of the Glens of Antrim. 'It's OK.'
>
> 'I don't mean the landscape. I mean,' she (Clara) pointed up towards the bird, 'up there. Waiting to kill something. Watching out for some infinitesimal movement. Bird or animal. Something vulnerable — alive and vulnerable. I find that very exciting, just that notion that death can come — wham — like that, falling from the sky.'
>
> He opened his mouth to say something, but found he couldn't. He wanted to scream at her, perhaps even to attack her with his clenched fists, thumping and thumping, making her cry out and bleed. Instead he turned and slithered down from the road to the edge of the stream, jumped across it, trailing one foot into a swirling pool as he went and then set off at speed across the valley, bounding and stumbling from tussock to tussock, dodging the whinbushes and the bog holes as he went.
>
> (*The Gingerbread Woman* 107-108. Emphasis by Yoshida)

鷹が獲物を襲うように空から突然、死が降ってくると思うのは、exciting だという Clara の言葉を聞いて、Lar は彼女を殴りつけたい衝動に駆られる。Clara を殴る代わりに、Lar は発作的に道路から谷間へと駆け下りて、足場が悪いにも関わらず闇雲に走り出す。このシーンに続く Lar の回想では、彼が妻と娘の死に自責の念を覚えていることも明かされる。Caitlin は亡くなる前日に娘の子守を Lar に頼んでいたのだが、Lar は勤務校での試験監督の仕事があったため、それを断っていた。同僚に仕事を交代してもらうことも頼めたのに、しなかった自分を責めているのだ。

ドライブの後、Dalkey に買い物に出た Lar は、Clara の母 Mrs. Barry と偶然出くわす。彼女に Clara とどこで知り合ったのかなどと尋ねられているうちに、Lar は妻子が爆弾テロに巻き込まれて死んだと打ち明けてしまう。このシーンでは、Lar の妻子がなくなったったのは、2 年前の春だったことも明らかにされる。

> 'When did this terrible thing happen?'
>
> 'Two years ago. It was a lovely spring day, just like today. A peace and love kind of a day. The kind of a day when you get up in the morning and say, "It's great to be alive." I don't want you to say anything, Mrs Barry.'
>
> She (Mrs Barry) shook her head.
>
> 'I don't want any of your decent kindly thoughts to rub off on me. I want to be allowed to hate in peace. I think that one of the reasons I liked Clara from the word go was the fact that I thought at that moment when I saw her first that she was going to do the thing that I had never yet had the guts to do. Get out."
>
> . . . . .
>
> 'I don't tell anyone. As I said before, I like my privacies. I don't want to rationalise, or share pain. I don't want to heal, because there is always the possibility that that might mean forgetting. I want to remember every tiny detail and I want to hate. That's all.' He put the cup down. 'I don't know why I spoke to you. I wish I hadn't. That's no reflection on you. Please believe that.'
>
> (*The Gingerbread Woman* 127)

この場面では、丸 2 年もの間、妻子を失った悲しみと怒り、そして自責の念に苛まれて生きているのに、下手に慰められるよりは静かにただ憎しみを感じていたいという Lar の思いが語られる。Clara に好意を持ったのは、自分ができなかった自殺をしようとしていると思ったからだということも明かされる。Clara の母は Lar に同情を示しながらも、病み上がりの娘に悪い影響を与えるのではないかと心配し、彼の妻子が亡くなった詳しい経緯を Clara に話さないよう Lar に頼む。

ところが Lar は、その次の日の朝に Clara の家にやってきた Doctor Ivan にも自分の過去を話してしまう。Doctor Ivan からも Clara には話さないように口止めされるが、Lar は最終的に Clara に全てを話してしまおうと決心する。Lar は

泊めてもらったお礼と称して、ダブリンの The Clarence Hotel のレストランに Clara を連れて行き、食事の席で自分に起こったことを全て語る。Lar が Clara に過去を語る場となる The Clarence Hotel が、「血の日曜日事件」(12)をテーマにした曲 "Sunday Bloody Sunday"(1983)で有名なロックバンド U2 のメンバーの所有するホテルなのは、一種の符牒だろうか。

> I'm going to tell her (Clara) the truth tonight, he (Lar) thought. To hell with her mother. I'm going to sit in that restaurant and with Caitlin at my shoulder, I will tell her everything. About love and hate and despair and the blackness that has covered my life for two years, and maybe she will touch me and where her fingers lie the blackness will peel away like a tired skin. Yes, I will do that.
>
> (*The Gingerbread Woman* 201)

Clara は「外科手術を受けたばかりだ」ということ以外、James Cavan との恋や、子供を産めない体になっていることを最後まで Lar には打ち明けない。それに対して、なぜ Lar の方は妻子を失った経緯や、妻子を失ってからの 2 年の間に感じていた憎しみや絶望、心の闇を全て Clara に打ち明けることにしたのだろう。その理由について、Lar が明確に語っているところはない。しかし、Clara が北アイルランドに対して嫌悪を露わにし、ドライブに出かけたときには「死が突然やってくることは exciting だ」と述べたこと、Mrs. Barry、そして Doctor Ivan が Lar の悲劇から Clara を遠ざけようとしたことなどが、彼の怒りを次第に増幅していったのかもしれない。妻子を失った悲劇から立ち直るように両親に急かされたときにも激しい怒りを露わにする Lar にとって、突然訪れる不幸を "exciting"と称すること、妻子の死を無かったもののように扱い、覆い隠そうとすることは許し難いことなのではないだろうか。

北アイルランドをエイズのような病に侵されていると見なし毛嫌いする Clara に Lar が過去の全て打ち明けてしまうことは、Clara に対して呪いをかけるようなものだ。「彼女の指が（自分に）触れたところから、草臥れた皮膚のように暗黒（過去２年の間、Lar を覆っていた暗黒）が剥がれ落ちていくだろう」という Lar の言葉は、過去を語ることによって自分の心の闇が Clara に伝染することを期待しているかのようだ。愛犬の Pansy とともに自宅に滞在させてもらった恩があることを考えると、Lar の行為は非情とも思える。しかし、同時に Lar の行為は、北アイルランド紛争の記憶に蓋をして忘れ去ろうとすることへの抗議を示しているのかもしれないとも思える。

Mrs. Barry や Doctor Ivan が心配する通り、病み上がりの Clara にとって、Lar の打ち明け話は心の負担となる。Lar の話を聞いた後の Clara のモノローグからは、彼女が Lar に嫌悪感を持ってしまっただけでなく、彼に対して嫌悪を感じる自分自身にも嫌気がさしていることがわかる。

> 'I'm sorry,' he (Lar) said.
> All I (Clara) could do was nod my head.
> He asked for the bill.
> I disliked him.
> There are times I really despise myself.
> (*The Gingerbread Woman* 205)

なぜ、Johnston は、自分の心の闇を他人に知られるのを嫌がっていた Lar が、最後に Clara やその周囲の人々に何もかも打ち明けてしまうという結末にしたのだろうか。最後に Lar が自分の心を打ち明ける相手—Mrs. Barry、Doctor Ivan、そして Clara—が、彼の近しい人々、つまり北アイルランド紛争の悲劇を日常的に目にしている人々ではなく、北アイルランド紛争を他人事として片づけ、目を背けている人々であるという点が重要なのかもしれない。Clara が経験した不幸は個人的なもので、心に秘めたまま最後には昇華して忘れ去ってもいい種類のものかもしれない。しかし、Lar の体験した悲劇は、無かったことにして忘れ去るべきものではないと Johnston は示唆しているのではないか。Jennifer Johnston は、北アイルランドを忌み嫌う Clara が否応なしに Lar の妻子が巻き込まれたテロについて聞かされる顛末を描くことにより、北アイルランド紛争から目を逸らす風潮を批判し、さらには北アイルランド紛争の記憶が風化していくことに歯止めをかけようとしているのかもしれない。

自分にとって嫌な話をされたことで、Clara は Lar に対して嫌悪感を持つが、救いを感じさせるのは、彼女がいつか彼の話を冷静に受け止める時が来たなら、その話を元に物語を書けるかもしれないと考える点だ。

> Another strange thought has come into my mind, that maybe one day I may use his story; steal it from him. Yes. Maybe he gave me more than I can at this moment handle, something to ferment and foment in the dark cavities of the brain.
> (*The Gingerbread Woman* 205)

もしかすると、Johnston の描く *The Gingerbread Woman* は、小説の中で Clara が執筆していた物語が発展し、Lar が語る悲劇—忘れ去るべきではない過去の記憶—と融合したものなのかもしれない。*The Gingerbread Woman* は、2 人の登場人物の語りを通じて、忘れ去るべき悲劇と忘れるべきではない悲劇を対比させ、現在に至るまで影を落とす北アイルランド問題の記憶を鮮やかに甦らせる試みの一つと言えるだろう。

＊この論文は、2019 年 11 月 17 日に愛知学院大学名城公園キャンパスで行われた、第 55 回日本イェイツ協会での研究発表『北と南，親と子—Jennifer Johnston の *The Gingerbread Woman*』に加筆・訂正を加えたものである。

［注］

(1) Killiney Hill：Dalkey Hill とともに Killiney Hill Park を成している丘で、近くにある Dalkey と Killiney の村を見下ろす場所にある。頂上からは北西に首都ダブリン、快晴の日には東と東南にアイルランド海とウェールズの山々を見渡せる。

(2) Clara は Doctor の名前を覚えておらず、単に Doctor とのみ呼ぶ。

(3) The Clarence Hotel：ダブリンにある高級ホテル。作中でもロックバンド U2 のメンバーが所有していることが言及されている。

(4) Morse: Colin Dexter の小説を基にした刑事ドラマ *Inspector Morse* のこと。英国 ITV での初回放映は 1987 年 1 月 6 日から 2000 年 11 月 15 日で、Season 8 まで制作された。日本では『主任警部モース』の題名で放映されている。*The Gingerbread Woman* の舞台となる 1990 年代のアイルランドでも *Inspector Morse* は視聴できたようで、この小説中では Clara のお気に入りの番組となっている。

(5) i と I の混在はミスプリントではない。小文字の i は、Clara の自信のなさ、心の揺らぎなどを表現していると思われる。

(6) Roscoffs：シェフの Paul Rankin が北アイルランドの Belfast で経営していたレストラン。1990 年代には、ミシュランの 1 つ星を獲得し、北アイルランドのみならずアイルランド全土に名を知られた。現在は売却されて無くなっている。

(7) Drogheda：北アイルランドと国境を接する County Louth (ラウズ州)の中で最大の町。Dublin と Belfast を結ぶ途上に位置する。ユネスコの世界遺産に指定されている Newgrange の古墳群などで知られる。

(8) Taubenpost～歌曲雑感：『シューベルト「岩の上の羊飼い D965」を聴く』に

よると、『岩の上の羊飼い』の最初の 4 節はヴィルヘルム・ミュラーの「山の羊飼い (Der Berghirt)」から、次の 2 節がファルンハーゲンの「夜の響き (Nächtlicher Schall)」から、最後の 1 節 (*The Gingerbread Woman* の冒頭で引用されている部分) は、再びミュラーによる「愛の思い (Liebesgedanken)」から引用されている。

(9) ここでは、オーストリアの作曲家 Franz Schubert (1797 年 1 月 31 日生、1828 年 11 月 19 日没:正確には 32 歳になる 2 ヵ月ほど前に病死) 以外にも、若くして亡くなったが名を残した人々が挙げられている。John Keats は、1795 年 10 月 31 日生、1821 年 2 月 23 日没の英国ロマン派詩人で、肺結核のため 25 歳で死去した。オーストリアの作曲家 Wolfgang Amadeus Mozart は、1756 年 1 月 27 日生まれで、1791 年 12 月 5 日に 35 歳で病没している。J. C. は、Jesus Christ のことで、推定される生年は紀元前 6 年から 4 年、没年は紀元 30 年または 33 年とされているので、34 歳〜39 歳で亡くなったことになる。Chatterton は、おそらく Thomas Chatterton (1752 年 11 月 20 日生、1770 年 4 月 24 日没) であろう。17 歳で自殺した英国の詩人で、中世の作と偽って自作の詩を発表したことで知られる。厳密には贋作作家なのだが、彼の書いた中世風の詩や短い生涯は、前述の Keats をはじめ、Percy Bysshe Shelly、William Wordsworth、Samuel Taylor Coleridge などのロマン派詩人に影響を与えたと言われている。"*Oh, synge unto me roundelaie, O droppe the brynie tears with me*" は、Chatterton 作 "Ælla, a Tragical Interlude" の中の "Mynstrelle's Songe" の最初の 2 行からの引用である。Elizabeth Bowen (1899 年 6 月 7 日生、1973 年 2 月 22 日没) と Kate O'Brien (1897 年 12 月 3 日生、1974 年 8 月 13 日没) は、若くして亡くなった人々の中には含まれない。いずれも、Clara が大学の講義で取り上げている有名なアイルランド女性作家である。

(10) "The Gingerbread Man" の物語は、最近では Works Cited and Consulted に挙げた Gigglebox のような YouTube 動画でも数多く紹介されている。

(11) *Mama Lisa's World* によると、この歌は 1940 年ごろから歌われている生粋のニューヨーク訛りの "The Brooklyn National Anthem" である。

(12) 「血の日曜日事件」(Bloody Sunday) は、日曜日に発生した流血事件に対してよく使われる名称だが、北アイルランド紛争に関しては、1972 年 1 月 30 日の日曜日に北アイルランドの Derry で起こった事件を指す。英国陸軍が市民権を求めるデモ隊に発砲した結果、13 人の市民が銃殺され、14 人が負傷 (うち 1 名は後日に死亡) した (CAIN Web Service)。

[Works Cited and Consulted]

Belfast Telegraph. "Where did it all go wrong for Paul Rankin?"
https://www.belfasttelegraph.co.uk/entertainment/film-tv/news/where-did-it-all-go-wrong-for-paul-rankin/28467305.html
投稿：2009/02/19/17:17. 閲覧：2024/04/02

Booker Prize Foundation. Jennifer Johnston.
https://thebookerprizes.com/archive/authors/jennifer-johnston
閲覧：2024/04/01

CAIN Web Service. "'Bloody Sunday', 30 January 1972 – A Chronology of Events."
CAIN Archive – Conflict and Politics in Northern Ireland. Ulster University.
https://cain.ulster.ac.uk/events/bsunday/chron.htm#:~:text='Bloody%20Sunday'%20refers%20to%20the,2.00pm%20from%20the%20Creggan.
閲覧：2024/04/01

Causeway Coastal Route. "The Nine Glens of Antrim."
https://www.causewaycoastalroute.com/glens-of-antrim
閲覧：2024/04/02

Chatterton Thomas. "Ælla, a Tragical Interlude." Poetry Foundation.
https://www.poetryfoundation.org/poems/43924/aella-a-tragical-interlude
閲覧：2024/04/02

DLR (Dún Laoghaire-Rathdown) County Council. "Killiney Hill Park."
https://www.dlrcoco.ie/parks-outdoors/parks/killiney-hill-park
閲覧：2024/04/02

Discover Boyne Valley. "Drogheda: Information."
https://www.discoverboynevalley.ie/boyne-valley-drive/heritage-sites/drogheda
閲覧：2024/04/01

Gigglebox (YouTube). "The Gingerbread Man."
https://www.youtube.com/watch?v=YoQyyB5xvLk
投稿：2018/01/21　閲覧：2024/04/15

Go to Ireland.com. "Visit The Glens of Antrim."
https://www.go-to-ireland.com/what-to-see/glens-of-antrim/
閲覧：2024/04/02

Ireland.com for United States (Tourism Ireland). "Discover the Glens of Antrim."
https://www.ireland.com/en-us/destinations/regions/glens-of-antrim/

閲覧：2024/04/02
ITV.com. *Inspector Morse.* (Internet Archive: Wayback Machine)
https://web.archive.org/web/20090502064231/
http://www.inspectormorse.co.uk/
閲覧：2024/04/01
IMDB (Amazon) com. *Inspector Morse.*
https://www.imdb.com/title/tt0092379/
閲覧：2024/04/01
Johnston, Jennifer. (2000) *The Gingerbread Woman.* Review (Headline Publishing)
Johnston, Jennifer. (1999) "Jennifer Johnston—Imprint: Writer in Profile (Interview by Theo Dorgan)." Directed by Bob Collins and Martina Durac (Loopline Film). IFI (Irish Film Institute) Archive Player. Originally screened on RTÉ1.
https://ifiarchiveplayer.ie/imprint-jennifer-johnston/
閲覧：2024/04/01
Johnston, Jennifer. (1998) *Two Moons.* Review (Headline Publishing). Published in paperback in 1999.
Johnston, Jennifer. (1984) *The Railway Station Man.* Review (Headline Publishing) edition in 1998.
Johnston, Jennifer. (1977) *Shadows on our Skin.* 1977. Headline Publishing edition in 2002.
Johnston, Jennifer. (1974) *How Many Miles to Babylon?* Published in paperback by Penguin Books in 1988. Reissued in 2010.
Leavy, Adrienne. "In praise of Jennifer Johnston." The Irish Times.
掲載：2017/06/14, 11:00. 閲覧：2024/04/02
*Mama Lisa's World: International Music and Culture.* "Spring Has Sprung, The Grass is Riz."
https://www.mamalisa.com/blog/spring-has-sprung-the-grass-is-riz/
掲載: 2021/03/20　閲覧：2024/04/14
Poetry Foundation. "John Keats: 1795-1821."
https://www.poetryfoundation.org/poets/john-keats
閲覧：2024/04/02
Poetry Foundation. "Thomas Chatterton: 1753-1770."
https://www.poetryfoundation.org/poets/thomas-chatterton
閲覧：2024/04/02
Sadie, Stanley ed. (1988) *The Grove Concise Dictionary of Music.* Macmillan Press.

Taubenpost～歌曲雑感：『シューベルト「岩の上の羊飼い D965」を聴く』より
http://franzpeter.cocolog-nifty.com/taubenpost/2013/11/d965-fcf4.html
投稿：2013/11/10　閲覧：2024/04/15
The Clarence Hotel. “About Clarence Hotel in Dublin City Centre.”
https://theclarence.ie/about/
閲覧：2024/04/01
Visit Dublin. “Killiney Hill.”
https://www.visitdublin.com/killiney-hill
閲覧：2024/04/01